美歴だより

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.27

CONTENTS

諫早市美術・歴史館だより

館長のつぶやき	2
BIREKI・レポート	3
いさはやの生活	4
いさはやの歴史	5
美術の部屋	6
古文書の部屋	7
お知らせ	

第52回諫早市小・中学校美術展

（令和4年2月4日～9日開催）

Kancho no tsubuyaki

館長のつぶやき

−Vol. 10−

「企画展を振り返って 」

令和３年度もわずかとなりました。今年度を振り返って特に印象に残った本館主催の企画展は、夏の「追憶～戦地からの手紙～展」、秋の「逸材と呼ばれた早世の画家『馬場孟臣』展」でした。「追憶展」は大塚梓様から、先の大戦で軍医として従軍され戦死された御尊父「大塚格」様が、戦地から送られた家族への手紙やハガキを御寄贈いただいたことを契機に企画したものです。御尊父の家族を思う心情が綴られているのに併せ、戦地での生活の様子や出来事の絵も添えられ、貴重な戦中の資料でもあるものです。また、「馬場孟臣展」は、馬場孟臣氏の姪である馬場史子様のご厚意で、南串山町御出身で東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業し逸材といわれ将来を嘱望されながら惜しくも２８歳の若さで亡くなられた「馬場孟臣」氏の生誕１００周年を記念し遺作を展示したものです。旧制諫早中学校（現県立諫早高等学校）を卒業されており、その様な御縁もあって本館での企画展となりました。展示した作品の中には、旧制諫早中学校時代のスケッチもあり、その高い技量の一端が垣間見えるものでした。

両企画展は、前者では戦地の厳しい状況の中でも家族を思う真心、後者では絵画制作への飽くなき探求と技量を高めようとする作者の情熱など、鑑賞する者の心に感動と癒しを与えてくれるものだったと思います。ご来館いただいた皆様からも同様のご感想や、もっと長く生きておられたら更に素晴らしい足跡を残されたのではないかという若くして亡くなられたことを惜しむ感想が寄せられました。遺族の方々からは本館で企画展として開催したことに対する感謝の言葉をいただきましたが、遺族の方々からは亡き人への深い思いがひしひしと伝わり、私どもも企画してよかったという充足感を味わわせていただきました。この場をお借りし改めて御礼申し上げます。

（館長　堀　輝広）

BIREKI・レポート

Vol. 17

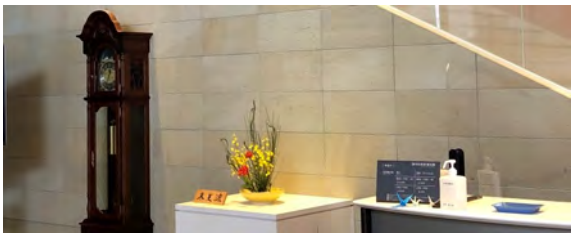
館の見どころ紹介！　昔の瓦を屋外展示しています

◀　美術・歴史館の駐車場に入ると
建物に沿って大きな瓦が並んでいます。

現在、美術・歴史館の建物周りで、天祐寺・廣福寺にあった瓦や諫早町役場に据えられていた鬼瓦等を展示中です。駐車場側だけでなく、建物の裏側にもありますので、探してみてくださいね。

建物脇の入口から裏手に進むと…　▶
もっとたくさんの瓦を見られますよ！

エントランスホール



館内にも、開館中いつでも見られる注目ポイントが。常設展示室はもちろんですが、それだけではありません。玄関を入ってすぐのエントランスホールには、諫早市指定文化財「唐比のくり船」の展示、諫早いけばな連盟の皆さんのご協力による「生け花」があります。ぜひ館内まで足を運んでみてください。

※「生け花」各月の予定はホームページをご覧ください。

（江上玲子）

いさはやの生活

VOL.9 奉公

奉公は他所で働き、それなりの賃金、対価を得ることで、農家や漁師の家では当たり前のように行われていました。中には「他人の飯を食わねば」と奉公に出されることもありました。

奉公では住み込みで期限を区切って働きますが、そのため年季奉公などと言っていました。盆や節季が節目、入れ替わりとするところが多く、ほかに12月13日など月日を決めて区切りとするところもありました。農作業、漁業、さまざまな職といった奉公先に応じた作業をするのですが、それを斡旋する者もいました。

農家では早朝の草刈りや草履綯い、漁師のところでは網の繕いなどの夜なべ仕事もありました。こうした仕事は個々の能力に応じて、取り決めがなされることがあり、朝草刈りでは30荷、草履は3足などと決めていました。ところで、奉公人はこうした作業で働きづめかというと、そうではありません。休み日があり、西里などでは田植えあがりに2、3日を休み日として家に戻っていました。中には3月や7月に7日ほどの休みをくれる雇い主もありました。諫早では奉公人を女性はアンネ、アンネヤン、男性をバードンと呼んでいました。アンネヤンは家事仕事もこなしていました。バードンは外での作業が大半で、牛馬を飼っているところでは、その世話や、牛馬の草履作りなどもありました。奉公人は期限がくると賃金をもらうのですが、奉公先が農家では実物での支給が多く、奉公期間にもよりますが１年では米3斗俵で女はだいたい3俵、男は8俵が多かったようです。なかには10俵もらうこともありました。現金での支払いは漁師のところや商家、職人のところで、こうした所では長く、数年にわたり奉公することが大抵で、年齢や熟練度により差異がありました。また、奉公人は着物を雇い主から支給されたもので、単衣や袷などを毎年もらっていました。枚数は雇主次第で、仕事がきつい所での年奉公では7枚ほど貰っていたところもありました。

こうした奉公に出るのは13歳くらいからです。この年齢から労働力として認められていたわけで、それより年齢が低い場合は子守り奉公でした。子守り奉公は、食べさせてもらうばかりで賃金がない所が大半なのですが、なかには1年分として米1俵を支給していたところもありました。子守りもなかなかきつい仕事で、皆が作業に出るころには子を背にからい、夕方まであやします。子を降ろせるのは乳を飲ませるときで、この時は母親が作業をしている田畑に行き、そこで乳を飲ませます。子守りをするのは10歳から12歳くらいで遊びたい盛りです。子守り仲間と、近くのお宮やお寺、お堂などが遊び場であり、子守りをする場でした。

奉公も時代とともに変わります。明治15（1882）年に大成社、大正9（1920）年に片倉製糸といった製糸工場が市内にできると、奉公といいながらも勤めるようになります。こうなると農家などへの奉公人は激減。奉公人がなくなり、勤め人にかわりました。さらにいろいろな物が出回り、自給自足の生活が変わると人手の必要もなくなり、奉公人の減少がさらにすすみました。

（川内知子）

いさはやの歴史　～石造物③・十王関係～

十王関係の石造物は、小野町の馬場性空寺谷にある石造物が唯一です。祭祀場所には「小野の六地蔵石幢群六基」(県指定文化財)1基や五輪塔・宝筐印塔の残欠などが数十基あることから、これらは十王関係石造物をはじめもとは別々の場所に祭祀されていたと思われます。付近には地名となっている性空寺(原口町の性空寺とは別寺)があったと言われていますので、この寺と関係があったのかもしれません。

十王は中国の道教の思想で、冥府で亡者を裁く裁判官の総称で、有名なのは閻魔大王です。生前に十王を供養していれば業報は軽くなると言われます。

初七日:秦広(しんこう)王･不動明王/二七日:初江(しょこう)王･釈迦如来/三七日:宋帝(そうてい)王･文殊菩薩/四七日:伍官(ごかん)王･普賢菩薩/五七日:閻魔(えんま)王･地蔵菩薩/六七日:変成(へんじょう)王･弥勒菩薩/七七日:泰山(たいざん)王･薬師如来/百ヶ日:平等(びょうどう)王･観音菩薩/1周忌:都市(とし)王･勢至菩薩/3周忌:五道転輪(ごどうてんりん)王･阿弥陀如来。また、十王信仰が盛んになると、7･13･33年忌が設けられ、7年忌:蓮華(れんげ)王･阿閦(あしゅく)如来/13年忌:祇園(ぎおん)王･大日如来/33年忌:法界(ほうかい)王･虚空蔵菩薩となります。(忌日･十王名･本地仏名【本来の仏・菩薩】)

奪衣婆（だつえば）

人が死後に最初に出会う冥界の官吏が奪衣婆とされています。奪衣婆は、亡者の衣服を剥ぎ取り、剥ぎ取った衣類は懸衣翁(けんえおう)によって川の畔に立つ衣領樹(えりょうじゅ)という大樹に掛けられます。衣領樹に掛けた亡者の衣の重さにはその者の生前の業が現れ、衣が掛けられた衣領樹の枝のしなり具合で罪の重さがはかられ、その重さによって死後の処遇を決めるとされます。

業秤(ごうばかり)

生前の悪業の軽重をはかる秤。正面の郭内に門柱らしきものと上屋を彫刻し、その内部に死者の罪の軽重を天秤にかけ、天秤が死者の重みではね上がっている様子を肉彫りしています。亡者は後ろ手で縛られています。

参考図書:『石仏巡り入門』

（大島大輔）

Vol.14

美術の部屋

諫早ゆかりの洋画家・野口彌太郎

野口彌太郎《那智の滝》1972年、油彩・画布、60号M、
諫早市美術・歴史館蔵

・第４５回ミモザ忌　3月21日（春分の日）10：30
・野口彌太郎作品展　3月19日（土）～4月3日（日）
観覧無料

野口彌太郎（のぐちやたろう・1899-1976）

東京に生まれる。父は現諫早市出身で、彌太郎は少年時代の一時期を諫早で過ごす。小野町の野口家墓所に永眠。

野口彌太郎は、二科展や独立美術展、国際形象展を中心に、日本洋画壇で活躍したフォービズムの画家で、その芸術性はヨーロッパから大きな影響を受けています。初めての渡欧は３０歳の時、パリにアトリエを借り、サロンに出品するなど、本場ヨーロッパで芸術の礎を築きました。２度目の渡欧は前回からおよそ３０年ぶりの６１歳の時でした。滞在中ヨーロッパ各地を旅行し、特にイタリアのベニスやスペインから大きな影響をうけ、作品の色彩は明るく鮮やかに、対象を端的につかむ筆触は更に単純化されていき、その特徴は彌太郎晩年の代表作《那智の滝》にも表れています。例年春分の日に、本館を会場に野口彌太郎を偲ぶ「ミモザ忌」が野口彌太郎顕彰委員会の皆様により開かれています。ミモザ忌に合わせて開催される野口彌太郎作品展で本作も展示予定です。ミモザの花が咲く春の佳日に、諫早ゆかりの洋画家・野口彌太郎の作品をお楽しみください。

（松本恵美）

古文書の部屋

家に眠る古文書

江戸や明治に建てられた旧家の襖（ふすま）や屏風（びょうぶ）などの下張（したば）りには、 使用済みの証文や大福帳の古紙を再利用していました。 そのため襖や屏風の張替えの際に、下張りに使用されていた古文書などが発見されることがあります。今回はこの「下張り文書」についてご紹介します。

下張り文書とは

襖や屏風の補強のために張り込まれた反故（ほご：帳簿や手紙、書付などの使い古した紙を集めておいたもの）のことです。

下張り文書の特徴

- 意識的に継承されてきた文書とは異なり、本来は廃棄処分されるものが建具などの一部として再利用され、偶然残されてきたものです。
- かなりの長期にわたり取り替えられることがなかった襖や屏風のある家屋からは、百年以上前の来歴のはっきりした資料群の収集が可能であると考えられます。
- 注意点としては、江戸時代から反故を回収して販売する業者も存在しているので、発見された下張り文書が必ずしもその家のものとは限らないということです。

皆さんの身近な家の中にも貴重な「古文書」は眠っているかもしれません。古い襖などがあれば大切に保管し、地域の文化財として残していっていただければと思います。

参考資料：尼崎市立歴史博物館ホームページ／鈴木 英治・上野 淑美「総社市旧堀和平亭に由来する下張文書の収集と資料化について」（『文化財情報学研究』第15号　2018　吉備国際大学）

（ 江口喬裕 ）

お知らせ

Information

発行日：令和４年２月

講座・イベント

○史跡見学
諫早の寺社（金泉寺）

金泉寺の護摩焚きに参加し、四面平などを巡ります
（現地へは公用バス利用）

と　き　令和４年3月26日（土）
8時30分～１６時
講　師　川内　知子（美術・歴史館専門員）
定　員　19名（抽選）
参加費　100円（保険料等）、昼食持参
申込締切　令和４年3月11日（金）

○歴史講座
江戸時代の災害Ⅴ

飢餓による佐賀藩諫早領の被害と対策について

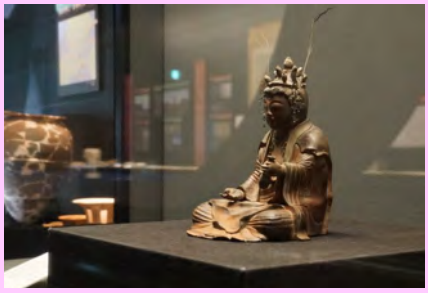
と　き　令和４年3月27日（日）
13時30分～１５時
講　師　大島　大輔（美術・歴史館専門員）
定　員　50名（抽選）
受講料　無料
申込締切　令和４年3月11日（金）

▼申込方法▼

講座名、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を記入し、以下の方法でお申し込みください。
・はがき（〒854-0014　諫早市東小路町2-33）
・ファックス（0957-24-6633）
・メール（bireki@city.isahaya.nagasaki.jp）
※お電話での申込はできません。

常設展示室

県指定有形文化財
「大雄寺（だいおうじ）の十一面観世音菩薩坐像（じゅういちめんかんぜおんぼさつざぞう）」
を展示しています



◆常設展示室のご利用について◆
開館時間　10時～19時
（最終入場18時30分まで）
休館日　毎週火曜日（祝日の場合は翌日）
観覧料　高校生・大学生・一般：200円
団体（15人以上）160円
小学生・中学生　：100円
団体（15人以上）　80円
※市内在住または市内在学の小・中学生は無料
※教育を目的として、小・中・高・特別支援学校生などが利用する場合は、引率の教員を含め無料（事前に学校長からの申請書が必要です）

◎マスクの着用や入館時の手指消毒をお願いします。
◎発熱等の症状がある方のご利用はお控えください。
◎イベント等は、今後の状況によっては中止・延期となる場合がありますのでご了承ください。
◎入館の際、連絡先等の記載をお願いしております。新型コロナウイルス感染症の疑いが生じた場合と館の運営のみに使用するものです。皆様のご協力をお願いします。

美歴だよりをリニューアルします。

いつも「美歴だより」をお読みいただきありがとうございます。
多くの方に館を知ってもらい、利用していただくために、これまでの「美歴だより」を見直し、よりたくさんの情報をわかりやすくお伝えできるように、リニューアルを計画しています。
令和４年４月発行の「美歴だより」をお楽しみに。

ー編集後記ー

表紙の写真は、「第52回諫早市小・中学校美術展」です。
毎年２月に開催され、授業で取り組んだ図工、美術、書写の学校代表作品約２千点が展示されます。毎年多くの方が来館されるため、昨年と同様に学校区ごとに観覧時間を分散し、手指消毒やマスク着用の徹底など、コロナウイルス感染症対策を十分に実施されました。皆様のご協力ありがとうございました。
作品はどれも見応えがあり、子ども達の発想や表現力の高さに毎回感動してます。また来年の開催も楽しみですね。
（野田さやか）

美歴だより　Vol.27
編集・発行／諫早市美術・歴史館　〒854-0014　長崎県諫早市東小路町2-33　TEL:0957-24-6611　FAX:0957-24-6633